

審査の結果の要旨

氏名 佐藤 弘之

本研究は、自閉スペクトラム症(Autism Spectrum Disorder, ASD)小児患者本人に対して望ましい告知のあり方を明らかにするため、診断初期段階での診断名告知・特性告知の現状の把握と、医師の告知行動に関わる医師の関連要因の解析を試みたものであり、下記の結果を得ている。

1. 日本児童青年精神医学会医師会員 1,995 名に対して質問紙調査を実施し 612 名から回答を得た（回収率 30.8%）。過去 1 年間に ASD 小児患者を診断した 463 名を分析対象とした。過去 1 年間に ASD 小児患者を診断した医師を対象とした調査の結果、診断初期の小児本人への診断名告知率、特性告知率は、それぞれ 15.3%、36.5%であり、親への告知率は、それぞれ 85.3%、86.3%であった。
2. 診断名告知のきっかけとして、小児本人が自他との違いに認識した時や小児本人が聞いてきた時に診断名告知をしていることが多く、医師は診断名告知に対して消極的であることが示唆された。
3. 小児本人へ ASD の診断名告知をするときに重視する条件・理由 20 項目を想定し、重み付けで尋ねたところ、本人の理解度が十分にある、本人が診断名を尋ねている、本人が他人と違うことに気づきはじめているなどが上位に挙げられた。この 20 項目について最尤法、プロマックス回転による因子分析を行ったところ、「受容準備」、「治療体制」、「告知ニーズ」の 3 因子が抽出された。
4. 診断名告知に影響する要因として、一般化推定方程式による多変量ロジスティック回帰分析の解析の結果から、専門科、最多患者年齢層、診断名告知をする時に重視する項目の因子分析から得られた 3 因子で有意な関連を認めた。専門科では小児科よりも精神科（小児）、精神科（成人）の方が告知をしていた。診断名告知に関わる要因として最も効果量の大きな要因は最多患者年齢層であり、最多患者年齢層で年齢が高い患者を診断している医師の方がより診断名を伝えていることから患者年齢が告知に影響していると推察された。因子分析から求めた 3 因子では、治療体制因子や告知ニーズ因子を重視する医師ほど告知をする傾向があり、受容準備因子を重視する医師ほど小児本人に診断名告知をしない傾向があることが判明した。
5. 基準未満での便宜的診断と ASD 観のどちらも診断名告知との間に有意な関連は認めなかったが、医師の 45.0%が便宜的診断をした経験があり、医師の 53.0%が ASD

を個性と考えていた。

以上、本論文は、普段、当該領域で小児・思春期患者を診ている医師に対して全国規模で初めて調査を実施し、日本の ASD 小児・思春期患者本人への診断名告知・特性告知の現状と、医師の告知行動に関わる医師の関連要因を明らかにした。そのため、今後 ASD 小児・思春期患者本人に対して望ましい告知のあり方を検討していくための重要な貢献をなすと考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。